

埋蔵文化財 愛知

No. 18



朝日遺跡出土の銅鐸

(4～5ページに関連記事掲載)

シリーズ「条里制」を探る

町田遺跡の条里地割

条里制の研究は、従来より、文献史料や現地表に残された条里地割に基づいて行なわれてきた。ところが、近年の発掘調査により埋没条里を対象とした研究も行なわれるようになり、新たな問題が提起された例も少なくない。

春日井市の南東に位置する勝川・町田・松河戸遺跡は、安食荘比定地とされた地域にあたり、近年当センターによって広範囲にわたって条里制遺構の発掘調査が行なわれ、新しい成果が得られてきた。ここでは、町田遺跡をもとに、地割と微高地の関係より、「条里制」の問題について考えていきたい。

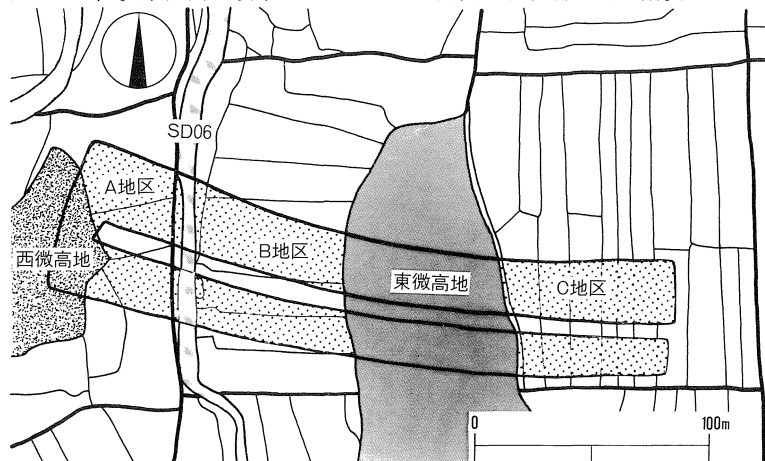
一般に、条里地割を認定する基準として次の2つの条件があげられる。第一に1町（約109m）四方の方格の土地割であること、第二に1町方格の内部が、長地型または半折型ないしその変形とみなすべき土地割によって区画されていることである。

町田遺跡周辺は、ほぼ1町四方の方格地割を示し、長地型の条里制遺構が広がっている。町田遺跡では自然地形に制約されながらも、3坪にまたがる水田跡を発掘している。西より、西微高地とSD06（用水路）の西肩に平行してはしる大畦畔に挟まれたA地区。その大畦畔と東微高地に挟まれたB地区。東微高地以東のC地区である。

区である。

東・西両微高地は水田化されておらず、微高地に規制された地割のあり方をA地区にみることができる。B・C地区では典型的な長地型の地割を示すが、A地区では東西方向の畦畔が西微高地に対して直交して、約25度南西方向にずれて築かれている。また、南にいくにしたがい、南北方向の畦畔間の距離が約3歩（約5.45m）ずつ広がっている。微高地が南東方向に張り出し、南にいくにしたがい西に水田を拡張できないための措置と考えられる。また、長地型の水田の畦畔間の距離は6歩（約10.9m）を基準としており、3歩はそれを半折した尺度である。A地区のように一見条里地割と無関係と思われる地割にも条里制に基づく尺度が用いられていることは、その規格性を考えるうえで興味深い。

次に、地籍図の地割と発掘された水田跡の地割を比較すると、A・B地区ではほぼ一致するのに対し、C地区ではズレが認められる。東微高地東端付近は、地籍図では水田化されているのに対し、C地区の水田跡では水田化されていないことより、地籍図の地割の乱れから水田化されていない地区が広がっていたと考えられる。おそらく、近世の新田開発の時期に東微高地が開発され、新しく地割替えがおこなわれた可能



町田遺跡周辺の水田地割（昭和14年地籍図を一部改変）

性が考えられる。このような水田化されていない地区は、勝川・松河戸遺跡でも確認されており、地籍図の地割の乱れからもより広範囲に存在していたと推定できる。

松河戸周辺の条里地割は15世紀代の所産と考えられ、康治二年（1143）検注帳案の記載の時期より新しいものである。しかしながら、水田化されていない荒地が広く存在していたことは検注帳案の記載より指摘されていたことであり、その関連性が注目される。また、「安食荘」現地比定に際しても、従来の地籍図による対比に再検討を行う必要があると考えられる。今後、考古・文献の両側面からの研究に期待したい。

（後藤 浩一）

参考文献

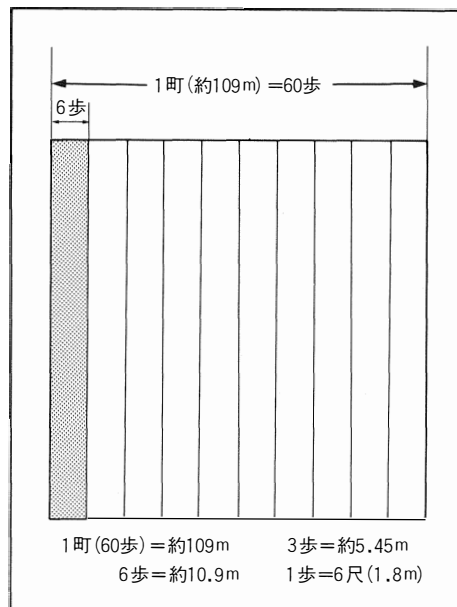
『町田遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター

1989

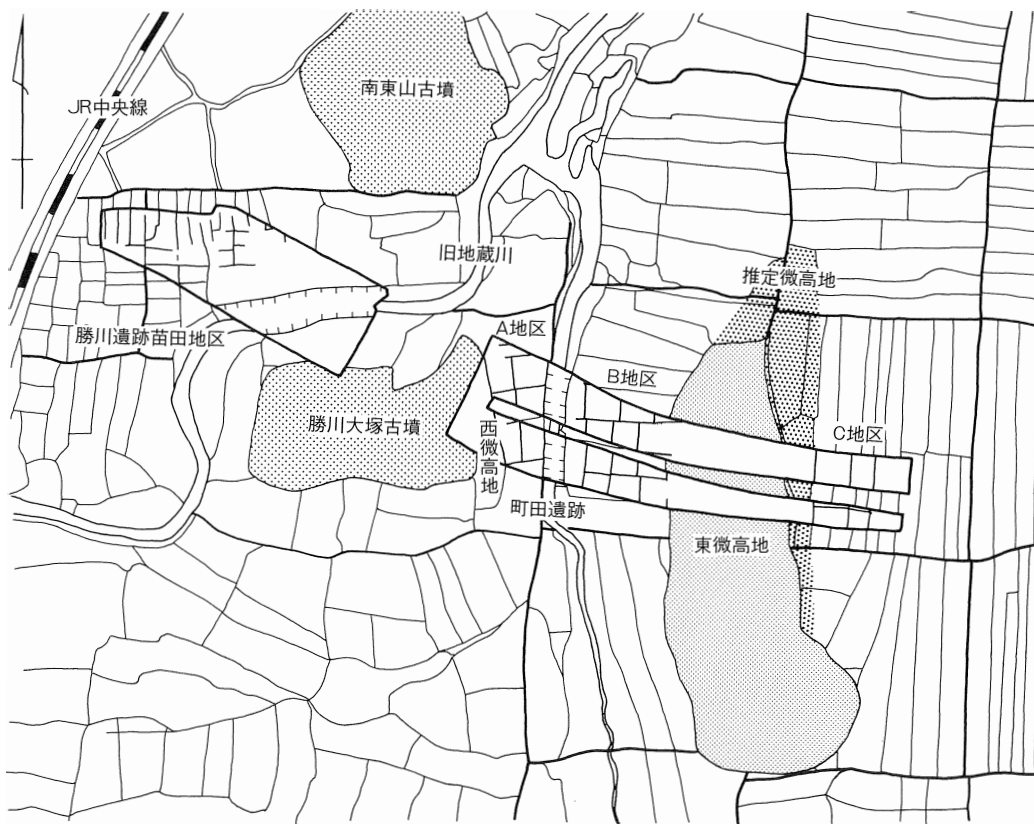
『年報 昭和62年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター

1988

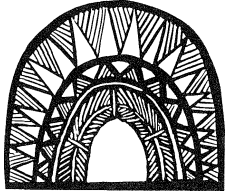
一段



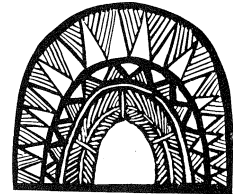
長地型水田の地割尺度



水田跡と地籍図の地割



朝日遺跡で銅鐸を発見



朝日遺跡では、これまでも銅鐸の破片（飾耳の部分）や銅鐸を模倣した銅鐸型土製品の出土があり注目されていた。そうしたなか、愛知県教育委員会が環状2号線関係の調査を開始して18年目にあたる本年度、ようやく待望の本体の出土となった。

銅鐸の出土地点は、南北2つある調査区のうち南の調査区（89B区）で、調査にはいつて二日目の発見であった。そこは現代の攪乱と中世の遺構群の密集するところで、現在まで残ったことがほとんど奇跡としかいいようのないところであった。もちろん、そこが調査区となったことも大きな偶然であろうが。

銅鐸はムラの外に埋められていた

銅鐸は、朝日遺跡の南居住域を囲む弥生時代後期の2重環濠のすぐ南側にあり、同じく後期に属す方形周溝墓との間に埋められていた。（右図参照）。

銅鐸は高さ46.5cm、最大幅32cmという中型の大きさで、東西方向に長い60cm×25cmほどの穴（埋納坑）に、鰭の部分に上下に垂直になるように身を横にしたうえで、鈕（把手）を東に向けて埋められていた。埋納坑は弥生時代中期の包含層を掘り込んでおり、銅鐸の中空の身に詰められた土には中期終わり頃の土器が含まれていた。たぶん掘りあげた土をそのまま使って埋めたのであろう。

銅鐸の埋められた時期は、方形周溝墓の溝から続く後期後半の堆積層の一部を埋納坑が切り込んでいるので、後期後半に接点があるものと考え。この時期はまだ環濠も方形周溝墓も埋まり切っておらず、付近は起伏のある地表となっていた。そうした場所において、環濠と方形周溝墓の間がわざわざ選ばれたのは、何か特別の意味があったのであろうか。

いずれにしても、これまで破片はムラの内部で出土したのに対し、今回のように完全な銅鐸

はムラの外部で出土したのであり、両者はもともと性格の異なるものであったかもしれない。

朝日銅鐸にみられる地方化の兆し

朝日遺跡の銅鐸は、最古・古・中・新の4段階に区分した場合の新段階に相当する。そして新段階のうちでは最も初期にあたり、佐原真氏の分類では突線鈕1式と呼ばれている。

この銅鐸には重要な特徴がいくつかある。

(1) 鰭と鈕の部分に施されている鋸歯紋（ノコギリの歯のような紋様）は、内部をうめている斜線が交互に向きを変えている。身の下部にある下辺横帯とよばれる横方向の鋸歯紋も同様である。

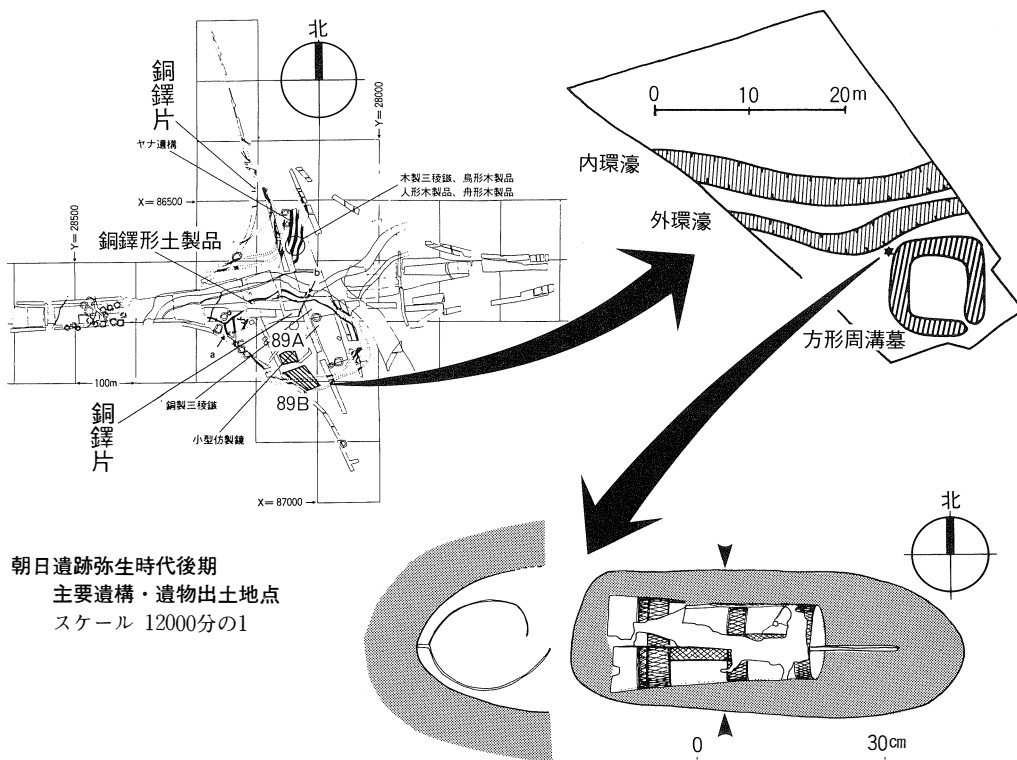
(2) 菱環（鈕にある半円状の帯状突起部分）に描かれた綾杉紋やその内側にある重弧紋は当地方の銅鐸に特徴的にみられる紋様構成とされている。

(3) 身の表面を飾る4区袈裟襷紋の中央の交差部分の斜格子紋は最後に施されており、この部分だけ区別されていたようである。西尾市小島銅鐸は6区袈裟襷紋であり交差部分に斜格子紋ではなく花紋を施しているが、交差部分そのものの扱いには共通性が伺える。

(1)(2)の特徴はのちに三河・遠江地方を中心に分布するようになる三遠式銅鐸に盛んに見られる要素であり、朝日遺跡の銅鐸はそれらに先行するものとして位置づけることができる。

(3)は朝日遺跡の銅鐸が小島銅鐸に先行することを示している。そして朝日遺跡に青銅器生産が行なわれていた可能性を考えると、これらのことは三遠式銅鐸の成立をめぐって重要な鍵となることは明らかである。今後、ほかの銅鐸との詳細な比較検討や科学分析を通してその評価を明らかにしたい。

（石黒 立人）



市町村だより

麻生田大橋遺跡出土の
土偶について
豊川市教育委員会



土坑：SK24出土の土偶

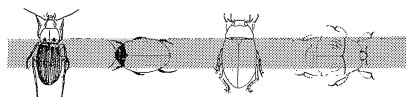
豊川市麻生田町に所在する麻生田大橋遺跡は、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であり、特に土器棺を多出する遺跡として著名である。

本遺跡では、豊川市教育委員会や(財)愛知県埋蔵文化財センターの実施した発掘調査により、これまでに50点をこす土偶の破片が出土しているが、市教委が今年の5月から6月にかけて実施した調査では、縄文晩期終末の楕円形の土坑の内部から、遺存状態の良い2体の土偶が出土した。

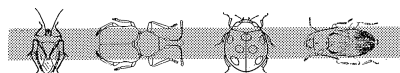
写真右側の土偶は、全長8.5cmをはかり、完全な形で出土した。また、写真左側の土偶は、復元すると全長16.8cmをはかるが、前者と同じ土坑内から、胴部・右腕・左脚が離れた状態で出土した。なお、後者は有髻土偶の一種であり、顔面には沈線による施文がみられる。

こうした全体形の判明する土偶の出土例は県内ではほとんどなく、貴重な資料といえる。

(前田 清彦)



遺跡を語る昆虫 — その1 —



稲作と昆虫

遺跡の調査において、昆虫は、遺跡をとりまく微細な環境を復元する手がかりとして重要な役割を果たすことがある。中でも、昆虫と稲作は弥生時代から密接なつながりがあり、『弥生文化の研究』でも稲作の害虫として、イネネクイハムシとイネノクロカメムシがとりあげられている。

イネネクイハムシは、ハムシ科ネクイハムシ亜科に属する体長9mmほどの昆虫である。これまでに勝川、町田、朝日遺跡などの低湿性遺跡から多数見つかり、稲作あるいは低湿地の改変との関わりが指摘されている。

一方、イネノクロカメムシは体長8mm~10mm、半翅目カメムシ科に属する昆虫である。かつてはイネの大害虫として恐れられていたが最近ではその数は激減しているという。大阪府亀井遺跡では、弥生時代後期の堆積物からイネのみがらとともに本種が見つかることから、

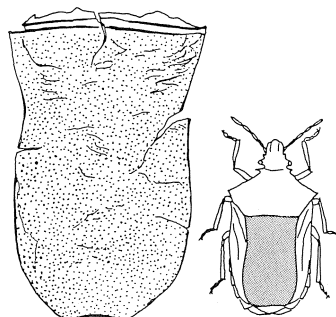
すでにこの頃にはイネの害虫として存在していたようである。

63年度の岡島遺跡の調査では、泥炭層から30点にも及ぶイネノクロカメムシが見つかった。泥炭層の堆積は弥生時代中期以前とされており、古代農耕を考えるうえで興味深い資料を得た。

(伊藤 隆彦)

参考文献

『弥生文化の研究1』永井ほか・1989

イネノクロカメムシ *Scotinophara lurida*
小楯板 長さ6.5mm 岡島遺跡

発掘ニュース

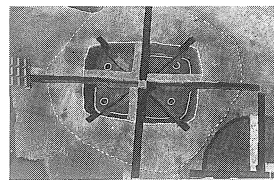
朝日遺跡

清洲町



A区全景

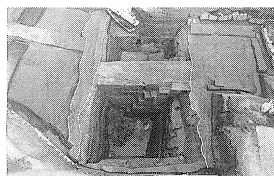
A・B区は南居住域に位置し、弥生時代後期の南居住域を囲む環濠2条、弥生時代中～後期の竪穴住居跡及び土坑、古墳時代前期の竪穴住居跡、弥生時代中期の溝を検出した。又、環濠の南側からは、銅鐸とその埋納土坑、弥生時代後期の方形周溝墓1基を検出した。



A区古墳時代住居

岩倉城遺跡

岩倉市



C区SD01

C区は、岩倉城跡の東端にあたる。幅12m、深さ3～3.5mの外堀を検出し、戦国期の陶磁器を中心とした遺物が出土した。また、天正大地震に関係する断層も確認した。D・E区は、五条川の左岸に位置し、岩倉城と同時期の溝、土坑、柱穴等を多数検出している。



C区断層

松河戸遺跡

春日井市



Ia区北から

I区上面では明治17年の地籍図に合致する水田を検出。鎌倉時代の山茶碗ばかり出土し、水田耕作の時期にさかのぼる可能性が大きい。下面は平安時代中期から鎌倉時代の溝5条（馬関、風字硯が出土）、古墳時代末から奈良時代にかけての溝を1条検出した。



Ib区東から

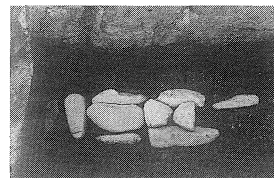
池下古墳

名古屋市



全 景

本年度は、全長約40mの池下古墳の前方部と後円部・周濠の一部を調査した。そして後円部から埋葬施設に伴う石組排水溝、前方部からは円筒埴輪の抜き取り穴などを検出した。出土した埴輪や須恵器から、築造時期は5世紀末から6世紀初期と考えられる。



石組排水溝

小田妻古窯

瀬戸市



B区SY02

B区では4基の窯が確認され、そのうちSY01は後世に上半分が削平されており、またSY03・04は造りかけて途中で放棄されたものである。SY02は全長約9m、最大幅約3.5mであった。出土遺物には、13世紀ごろの山茶碗・小皿・陶丸・土師器鍋などがある。



B区SY04

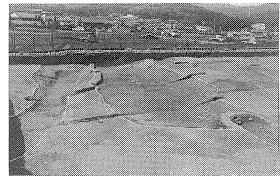
東光寺遺跡

幸田町



A区全景

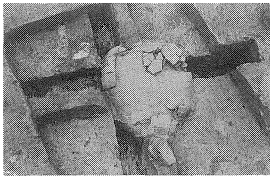
主要な時間は、縄文時代晩期、弥生時代後期及び中世（14C）である。縄文晩期の溝状遺構より、東三河地方を中心とする稲荷山式土器併行の土器が多量に出土し、この地域での重要な資料となると考えられる。また、弥生後期の環濠と推定される溝4条を検出した。



溝状遺構

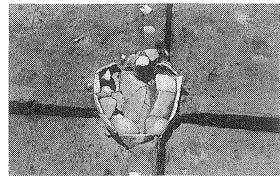
麻生田大橋遺跡

豊川市



土器棺

豊川右岸、豊川市麻生田町に所在する。昨年にひきつづき調査を実施。現在までに縄文時代晩期～弥生時代前期にかけての土器棺を50基ほど検出し、過去の調査を合わせた土器棺の総数は200基をこえるところとなった。そのほか、中・近世の遺構・遺物も検出。



土器棺

セ ン タ ー 日 誌

役員の異動

理事 辞任 6月20日 花木 寛雄
〃 就任 8月1日 稲石 新

埋蔵文化財展

第1会場 安城市文化センター
7月28日～8月6日（9日間） 1440名
第2会場 愛知県埋蔵文化財調査センター
8月14日～8月31日（16日間） 1010名

埋蔵文化財講演会

第1会場 安城市文化センター 250名
田中 琢「考古学は何のためにあるのか」
第2会場 弥富町総合社会教育センター 200名
佐原 真・高島忠平・石黒立人
「今よみがえる弥生のクニ」

現地説明会

平成元年5月20日（土）
朝日遺跡 参加者 550名
平成元年8月5日（土）
池下古墳 参加者 250名

来 訪 者

89・3・2 東京都江東区営繕課 3名。
3・8 倉敷市社会教育課・営繕課 4名。
・15 吉良町教育委員会 大溪紀雄氏他1名。
・16 刈谷市教育委員会 村瀬典章氏。

- ・22 岐阜県教育委員会文化財課 丸山幸太郎・町川克己氏。
- ・24 神奈川埋蔵文化財センター 御堂島正氏他1名。
- ・28 大口市教育委員会37名。
- ・29 文化庁 山崎信二氏。
- 4・10 大府市養護学校2名。
- 5・2 弥富町立栄南小学校59名。
- ・9 奈良国立文化財研究所 佐原 真氏。

埋蔵文化財愛知 No.17の訂正・追加

P 2 ○報告書の刊行
追加 三の丸遺跡（合同庁舎建設関係・新図書館建設関係）
P 7 豊田市教育委員会社会教育課電話
訂正 〈0565〉31-1212→〈0565〉32-6561

埋 蔵 文 化 財 愛 知 No.18

発 行 平成元年10月
編 集 (財)愛知県埋蔵文化財センター
〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田
字野方802番24
T E L 0567-67-4161
印 刷 株式会社 クイックス